

## 風雲録

著者	紫洋, 逸人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 5
ページ	9 3 - 1 1 0
発行年	1899-11-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5442">http://hdl.handle.net/2298/5442</a>

## 風雲錄

### 續學寮五分論

紫洋逸人

#### 第一、緒言

自治制と含監制との利害得失は實に習學寮の根本的大問題なりと雖も、余が謂ふ所の學寮五分案の如きは些々たる末事に過ぎず、何となれば前者は昨年紛議の節も校長閣下が慎重審議の後漸く裁決を與へられし程のものなりと雖、後者は習學寮細則第二條に其含監の權限に屬するを明記せられたるを以て、荷も含監にして篤と其利害を打算し責任を帯びて決行する以上は其横たると縦たると將た十文字たるを問はず其他如何なる分割を設くとも決して妨げなきものなり、故に此論をなすに當り最も余が恐れざる所は之を以て區々たる蝸牛角上の論以て議題となすに足らずとして視線の外に遠ざけられんことにてありき、然るに瀧川及び飄然の兩君は之を以て開日の案となさず、或は研究するに價ありとか或は通讀三四玄たりとか種々なる褒辭を寄せられ且つ最も丁寧懇切に批評匡正の勞を取られたるは實に生が過分の光榮とする所なり、夫れ既に過分とする所なりと雖も未だ討論終結の時期にもあらざるを以て更に少く辯ずる所あらんとす、

#### 第二、飄然君の銳鋒を迎ふ、

同異の辯を破る、

詳細は議せず、

不整合を咎む、

余密かに飄然子用兵の法を窺ふに頗る奇兵を得意とするものゝ如し、故に先輩の範圍を破らんと欲  
きて先づ進み來るものは同異の辯なり、夫れ堅白同異有厚無厚の察は察ならずんばあらずと雖も、君  
子之を取らざる所以のものは其抽象的理論として心的訓練を與ふるの外更に實事を處斷すべき價值  
なければなり、哲學は知らざれども宇宙間の萬有は一元若くば二元より千萬無數の各個体に到る  
まで段を追ひ級に従つて分類せられ得べきものなりと聞く、然るに彼同異の辯士等は此階段の分  
類を以て有りど云へばドコまでも有るが故に萬物悉く異なれり、無しど云へばドコまでも無きが故  
に萬物悉く同じど云ふ筆法を以て素人を瞞着せんと欲するにあり、勿論數千年の昔には此等の詭辯  
にて瞞着されし人も多少ありしに相違なきも、今日開明の世にて苟も常識を有するものには斯かる  
掛引を受くるものあらざるべく、且つ實事を處斷するには分類の程度を適宜にするとの如何に緊要  
なるかを解せざるものあらざるべし、余が所謂先輩の範圍は即ち學寮昨今の時局を處斷するに最も  
適宜なりと信ずる分類法によりて生じたる結果なり、然るに君が云ふ所の先輩の範圍は學寮問題を  
放れて全く之を物理化學的に觀察せたるものなれば、必ずしも括弧を設けて尤も工學部だけは云々  
と辯するを要せず、日本全國は愚か古今東西の名士は悉く先輩と云ふも亦可なるにあらすや、要す  
るに君が奇兵として用ひたる同異の辯は今月今日既に余が論を胡魔化するの能力なきもの也、

次に辯すべき所多々ありと雖も、いと細やかなる議論の中より更に細やかなるものを討論せば本  
陣の所在を失なひ歸着する所ならんことを恐るゝを以て、詳細の分は深く争ふことを爲さざるべ  
し、且つ科學上の論説と異なり、斯かる問題は一定せたるシステムを有せざるを以て詳細に入ると  
きは余の言ふ所誤されるもあるべく、君等の説く所眞ならざるもあるべく、眞偽辯別すべからざる



頗る囑望する所なきにあらずと雖も、前號誤て諸君に聯想せしめたる自修時間の條に就ては別に入あることなれば余が特に意を用ふべき所にあらず、唯學寮五分は強固なる社會を生ずべきに依り、其強固なる丈制裁力も強かるべしと思考して或種の社會的制裁論者の歡心を買はんと欲したるに過ぎず、故に御便宜とあらば暫く之を撤回を置くも亦苦しからず、斯の如きは固より己知の事實を演繹して得たるものなれば、之を取り消すも唯末葉を拆るのみにて別に根底を危くする譯のものにあらず、次に君が壓搾器的に一間亦一間を發せられたるものゝ如きは、余若く他日志を得て本案を學寮會にでも提出せたる曉には一々明解をも差上げ申すべしと雖も、今爰に無暗に詳細に立ち入るは無罪の讀者八百名に對えて憚りあれば先づ暫くの謹慎を守るべし、

以上は兎もあれ角もあれ瀧川君批評の大意は今少しく研究し來れど云ふに外ならざるが如し、是最も余が應對に苦まむ所なり、而も熟々按ずるに余が前號の所論に於て主とて力を用ひし所は平均主義の不利なるにあり、而して本聲たる各部主義の有益なることに至りては勉めて簡略に従へり、蓋し各部主義も固より完全なるものに非らずと雖も、平均主義が如何ばかり不利なるものなるかを知るときは、比較的各部主義を採用するを可とせらるべしと信じたればなり、然るに批評反駁の勞を取られし兩君は、共に現制即ち平均主義を辯護せらるゝ事なくして唯各部主義をのみ難せらるゝは聊か六波羅襲撃時代の義朝に似たる觀なくんばあらず、然りと雖も余の部分に於て各部主義の利益を論することも彼の分にては聊か簡に失するを以て、更に學校團結と云ふ方面より五分論を觀察し以て瀧川子以下の望を充たんと欲す、

#### 第四、全校團結論、

子守り主義、怪腕絶棒主義、單位の撰擇、重案主義、

余は學校の統一及び校風の振作等に關しては、少なくとも飄然子と等しき渴望を有え、又より多く忠實ならんことを期するものなり、余が五分案は實に是を以て第一の目的となすものなり、尤も統一を欲するが故に五分すべしとは一見不整合に似たるを以て、或は余の自家穿堀の穴に陥りてを笑ふものあるべしと雖も、余は固より之を笑ふものを笑はんと欲するのみ、

さて學校團結を唱ふるものあるを聞くに、先づ飄然子一流の團結せよ團結せよと誦するもの最も多く、未だ如何にして團結すべきかを説くもの稀なるが如し、蓋しチンチユマーのレビートは或は兒童を以て眠らしむるに効あるべしと雖も、團結せよ團結せよの操り返えが果えて此子守り歌と等しき作用を吾人に及ぼすや否やは疑問なり、況んや彼等の多數は其レビートに就てすら彼の子守り女式の辛勞なく、漸く一二回を唱ふるや忽ち頑兒の眠らざるに愛憎をつかして決然袂を脱するもの最も多きに居るに於てや、余は必ずしも此種の徒を責むるにあらず、其愛校忠會の餘に出でたるを認むればなり、温にえて進まば以て風教を補くるに庶幾く矯にえて退くも猶慷慨の氣を存するに足ればなり、而も其見識の皆無なるは斯かる社會的問題を論議すべき限りにあらず、次に最も廣く行はれたる誤謬の見は一部の團結を以て如何なる場合と雖も必ず全部の團結に害あるものとなえ、苟も一部の團結を妨ぐるは即ち全部の團結に一步を進めたるものなりと信するにあり、此説の眞偽を判せんと欲せば外出の序白川の濱を見れば足れり、濱の砂礫は如何なる部分も固塊をなす所なまど雖も亦全体の固まりを例なきにあらずや、是を以て之を見れば一部の團結なきが直に全部の團結あるにあらざるを以て、全部を團結せしめんと欲せば一部の團結の有無に關せず更に非常

の勞力を要すること明かなり、例令ば白川の砂を固めて小口十間の立方体を作らんと欲せば誤謬論者は之に相當なる砂を積みて直にセメント數百駄を加へんと欲するならんも、抑も如何なる絶棒を以て之をませ如何なる怪腕を以て之をねらんとするか、思はざるの甚だきのみ、此工業の設計は實に余が學案五分論を説明するに足るものあるなり、

此種の工事に於て先づ着手せざるべからざるは容積の單位を擇び之を以て方形若しくは長方形を造るにあり、既にセメントを以て固められたる適當なる單位容積の砂塊を得んか、之を積みて大方形を築くは易々たるのみ、蓋し單位の撰擇は社會各種の組織をなすに當りて最も緊要の事に於て其適度を得ると得ざるとは概ね全局の成敗を支配するものなり。例令ば秦の始皇が政區の單位を小にして破れたるが如き、唐の末葉之を大に於て苦しみたるが如き、近くは騎兵砲兵の旅團組織が大陸的戦法に欠くべからざるが如きは如何に其攻究すべき問題なるかを知るべきにあらすや、故に學校團結を企つるに當りて先づ研究すべきは如何なる單位が之を成すに當りて最も適當なるやの問題なりとす、

現今本校を組織する所の單位に種々あり、教場的宿所の及び地方的單位の如きは其最も較著なるものにして、智育的体育的單位の如きも亦聊か考ふべきものなくんばあらず、前者は硯友會華陵會懇話會九州史談會佛教青年會等を云ひ、後者は擊劍部柔道部ベスボール派ボート組テニス連等を指すものに於て、此等の諸塊が別に弊害なく於て公共的思想の涵養に少なからざる助力を與へつゝあるは掩ふべからざる事實なり、然りと雖も此等は別に主眼とする所の目的を有するものにして、加ふるに右の内孰れにも属せざるもの頗る多きを以て、吾人は是等を直に學校團結の方便に利用するこ

と能はざるなり、次に地方的單位と稱するは即ち彼の入釜なき地方團體の謂にして、唯に學校團結の用をなさざるのみならず、是を以て見る影もなきに到らしめたるもの主とて其強固に過ぐるより來りたる結果なれば、苟も本會の統一を圖らんと欲せば大に其勢力を殺ぐの必要あること前號に論じたるが如き、故に残す所は各部各級等の教場的單位を取るべきか將た學寮各室等の宿所の單位を取るべきかを決するにあり、

學校を分つに級を以てし級を分つに組を以てせるは既に明々赫々の事、級には監督あり委員あり、劍を磨き書を繙き酷苦辛酸を共にするの傍亦茶話會親睦會等の催ふしもあり、故に其教場的單位たるも等々又社交的單位とて毫も欠く所なきが如しと雖も、是抑も不忠實の觀察たるを免かれず、勿論各級各組と雖も或る程度までは社交的單位たるの用をなすに相違なきも其程度は思の外に低きものに於て是より以上の程度に達するは實に容易の業にあらず、蓋し教場の集合は休暇祭日を除きて殆んど止む時なきも、唯に正確なる目的の爲めに正確なる働作をなすに過ぎざるを以て、之に依りて社會的融合を助くるは極めて稀なりとす、且つ下宿黨の面々は多くは喇叭を聞いて後登校未だ喇叭を聞かざるに既に四散して同級の人には其の行く所をも知られざるもの最も多きに居るを以て、斯かる團體に向つて多きを望むは少しく無理なりと謂はざるべからず、余が所謂重寢主義なるものは此間の不足を補はんが爲めに起りたるものに於て、重寢と云ふ文字こそ余の創造に属すべきも其主義は既に當代の認可を得たるもの、現に國庫が數萬の金を割きて二棟の習學寮を我校に與へたるが如きも亦此主義に基けるは明かなるを以て余は今更ら此主義を主張するの愚をなさず、直に其實行の上に就き聊か審議する所あらんとす、それに先ち先づ注意すべきは本校の如き半寮半宿の制



を取れる所に於ては、學寮は唯に學寮夫れ自身の團結を固くするのみならず、猶學校の中心となり基礎となり寮生以外を風靡して所謂學校の統一校風の振作と云ふ大々的任務を有するを知らざるべからず、現時の學寮が果して斯かる重大なる任務を全うしつゝあるや否やは既に疑問とするの價値なきを恐る、何となれば現時の學寮と二十一個所の大下宿屋（若し有りとせば）との間には殆んど區別の存するを見ざればなり、而して其各室なるものも慥に一種の結合をなせるには相違なきも、其結合は唯に狹義に於ける友誼的に限られたるを以て、此等を單位とて學寮全体の團結を企つるが如きは現に其無効なるを證せるにわらずや、増して全校を風靡して統一あり意志ある一團となすが如きは思ひも寄らざる所なり、即ち余の見る所に依れば、各室は團結の單位として小に過ぎ、全寮は大に失すること恰も怪腕絶棒主義と等なきを以て、此中間に各部なる新單位を設け、之を以て基本單位となせ、之を數分して室を設け、之を合併して全寮を組織するは最も時勢に適したるの策なりと信ず、余が學寮五分論の眞意は實に之を以て學寮の團結を遂げ推して全校に及ぼすべき最良の單位なりと信ずるにあるなり、若し夫れ五分の語によりて直に各部の衝突を聯想し、狸河伯の例によりて直に學校の團結を無視すとすが如きは所謂辭を以て意を害するものにまて與ふるの取るたるを知らず分つの合ふなるを解せざるものなり、

## 談 片

（運動會に就て）

神 谷 生

○當校運動會が迨々發達隆盛の域に向ふの趨勢あることは予の疑はざる所、然れども今回の運動會

を昨秋のものに比すれば其進歩果て如何。

○ハンヤカップの制度を適用したるは今回を以て嚆矢とす、是れ一の顯著なる發達たるや言を俟たず、然れども提打競走の如き兒戲に近き競技の申込者太多にして捧飛、鉄丸投の如き manly なる競技を成すもの五七名を出てず。豈に慨嘆の極ならずや。

○由來九州は尙武の地なりとは人も信之我も許す所、予は是迄の成績を以て九州に於ける最高庠序の學生より組織せられたる競技會なりと言ふに忍びず。

○謙讓は美德なり、然れども争ふへきに會ては勇邁直往善く争ひ健けに闘ふの勇と斷となかるへからざると勿論。學藝の上にて超出せると運動の上にて拔群なるとは俱に性格の非凡に於て將來爲す有るを徴すべく學生の名譽たるとは則ち一なり。

○競技は君子の争なり、名譽の爲めの争なり而て賞品は此名譽を表彰する目的のものならざるへからず。足袋、襦袢の如きものを賞品となすとは予の采らざる所なり。

○僅々五六時間の裡に三十幾番の競技を演了せんとす、委員の苦心知るべきなり。召集係點呼數回に於て競技者徐ろに支度に取掛る。冷淡斯の如し噫。

○運動場に雀羅を張らんとする乎とは予が曾て委員會に於て絶叫せたる所、各種の競技は平素のトレーニングを要するや大。今や秋高く氣清し正に field 親之むべき時なり。

## 小人跋扈

(穗)

村)

小人と婦女とは養ひ難しとは既に古聖も云へり、婦女は暫く云はず、彼の小人を見るに其失意の地位に在るや低頭平身只管人の己を眷顧せざらんことを恐れ悲鳴を擧げて只憫みを是求む、其の様陋劣なる候補者が其の擢舉人に對するが如し、實に笑ふに堪へたり、然るに彼一度び得位の境遇に遭はん乎、昨の猫は今の虎となり倨傲不遜其の面に唾するも猶足らざるなり、獨り大人に至りては則ち然らず、高きに居ると雖も傲らず、低きに在りと雖も枉けず、恒に平然とて變ることなし、見る者時に不遜なりと爲すは枉げざるを誤認せるのみ、大人此の如くにして小人彼の如きもの何ぞや、小人には毫も自個てふ觀念なきか爲なり、既に自個なき、安んぞ主張あり意氣地あり、抱負あらんや、朝に浮び夕に沈むもの固より其處なり、打てば泣き撫れば裾り殆んど濟度々難き小人何ぞ夫れ多き、此の如き者幾百千人ありと雖も國家に益する所固よりこれあることなし、顧みざるべからず、思ふに今日は小人跋扈の時代也、而も大人は之を見て破顔一笑冷然たること水の如き、噫

## 朋黨比周と陋劣なる心事

(穗 村)

憲法政治に政黨の存立は免れざるか故に教育界にも朋黨の分立は避くべからずと云ふ乎、何ぞ不無理の甚しき、太陽は自ら光を發するが故に月も亦然らざるべからざる乎、況んや憲法政治と雖も私黨の存立は斷じて之を許さざるに於てをや、近時教育界の頗る亂調を極むるもの畢竟朋黨比周の結果のみ、其の弊は吾人既に之を我校に於て屢々實見したり、然れども今此處に之を詳述するを欲せず、思ふに教育界の私黨は赤門、茗溪の諸派以下其の名無きものに至る迄を舉れば其の數殆んど千を以て數ふべく其爭ふ所は教育の大道にあらずとて名利の一點にあるは彼等が從來の行動によりて之

を知るべし、其の目的此の如くにして其の手段の陰險なる、其の心事の陋劣なる政黨者流と雖も尙爲に鑒覺すべし、讒誣排陷は荐りに行はれ或は彼等席次の末を争ひ、生徒の輿望の如何に貴きかを知らず、其の高尙なる天職を忘れ、度量の狭小にして、心事の公明正大ならざる實に豫想外なり、殊に『チボチズム』などの行はるゝこと此の社界と雖も亦免るべからず、故に假令一教員一囑託、一雇の移動と雖も細に之を探究すれば實に其の間幾多事情の纏綿せるを發見すべし、勢此の如くなるを以て子弟の其の師を見ることが尙世人の黨人を見るが如く一も尊敬の念なく、三人稱には概ね之を呼び捨てにし或は異様な綽號を以てするものあるに至れり、師弟の關係今日の如く冷淡なるは東西未だわらざるなり、教育の學にざる寧ろ當然と云ふべし、今にまで改めざれば遂には我國の前途を危くせむ、天先づ晴れずんば地未だ乾かず、蓋し今日生徒が其の藩により國により縣により相依り相親み殆んど一黨を形造るもの直接には上之を教へ間接には政界之を導くが爲にあらざるか乎、斯く言へども吾人は固より今日の教育家中にも頗る尊敬すべき有徳の君子あり或は局外に立ちて濁流に超然たる者はなきにあらざるを知る知つて而して先づ之を稱せざるものは其の數多からざるが爲なり。鯁言暴語は情の切なるが爲なり、若し余か言誤なるとを證するの人あらば、余は實に天下の爲に之を喜はざる能はず焉、

### 訪問時間の設定を望む

今日、人動もすれば曰く、師弟の交情うすき事紙の如き、今日より甚しきはなし、弟子が師に對するを見るに、恰も行客が商賈に對する如しと、何等の暴言ぞ。吾人は全然之を信する能はず。少くとも本

校内に於て、師弟の情誼うすきこと此の如くなるを信ぜざる也。然れ共、其交情が、昔日に於けるが如く密ならず、感化の度も、昔日の如く大ならざるは、萬人の云ふ所にして、吾人も亦大に慨する所なり。今其よりて来る所以のものを考ふるに、其原因一ならざるべしと雖も、師弟觸接の機會少くして、師弟相知らざる事が、最大原因たらずむばあらず。不知は誤解を來し、誤解は冷淡、衝突、排讖等あらゆる惡性の源となるなり。山川先生の教鞭を吾校に取らるゝや、先生の門を叩きて、學科以外、諸般の教導を仰ぐもの引も切らず。先生も亦好みて諸生を引き、懇切誘導到らざる所なかりき。先生一度行きてより、又先生の如きを見ず。師諸生を待たざるの、諸生之を訪はざるか。師たるもの、何ぞ諸生を待つに吝ならん。然らば、諸生何が故に之を訪ふ事をせざる、訪問時間の定めなきことまた之が原因たらずんばあらず。一週何時間、教場内に於ての面接は、今日の如き忙なき學科に於ては、學科以外に、殆ど得る處なまじと云ふも不可なかるべし、是れ諸先生の感化力、うすきが故にあらず、古へ私塾時代に於て、其所教が、殆ど皆、倫理道德書なりしと異なりて、今日の課業は、其道徳倫理の余地を見出すには余りに科學的なれば也。且つ其云ふ所、一級普遍的のものにして、個人的ならざるも亦大に其感化能力を減有するの理由たらずんばあらず。一週一時間の倫理はあれども、これとても數百人の頭に共通普遍的なる、而かも小學以來十余年の間幾度も繰返されたる學說を注入的に更に繰返して胸中に確かならしめ、これによりて學生の道義心を高めむとするに過ぎざれば、之によりて吾人が日常遭遇する複雑せる千差萬別の境遇を處理之行かむ事は甚だ難し。勿論幾何學に於ける數項の公理は、之を演釋して、凡ての定理、問題を解釋する如く、倫理教室に於て吾人が習得する倫理學說を演釋すれば吾人が日常遭遇する殆ど凡ての境遇を處理する方法を見出すには相違なければ、此演

釋法は極めて困難の事に属す。公理を知るのみを以て幾何學の全部を解釋する能はざるが如く、倫理教室に於て習得する倫理學說のみを以て吾人の凡ての境遇を處理し高尚なる品格を養はんとするは絶對的に不可能の事には非るべきも極めて困難なる事なりとす。古の道德家が其門弟を教化するや、講義に於て説く所は人倫五常の普遍的學說なれども、已れの行爲が其實踐躬行の模範となりて、學說以外細項の説明となり、常に直接に門弟に接きて其感化を日常の行爲によりて傳へたり、されば其門人は、朝には此學說の講義を聞き、夕には或は座談に或は其師の行爲によりて已の道義心を確實に養ふ事を得たりしなり。其方法は注文的にあらずして開發的なり。道義の觀念は今日の如く無理往生に知らせられたるに非ずして、疑問を経たる悟得なり。其道義心の堅固確實にして實踐躬行的なる亦宜ならずや。今日に於ては倫理教室内に於て、其講義によりて學說を聞くことを得れども、教室以外に於て、境遇の處理に關する疑問を質問するの機會極めて少し。故に彼等は理を論ずるや極めて高く且つ巧みなり、然れども自ら如何にして之を實行せんとするか、如何に於てその境遇に處するかに對する確實なる定見を有するもの殆どあるなき。彼等皆曰く世の中は理窟通りに行くものにあらす、處世の術を倫理學に求むるは木に據りて魚を求むる如しと、果て然らば倫理はこれ偽善の裝飾物に過ぎざらむのみ。倫理學の蔑視せらるゝ夫れ此の如し。今日の青年が薄志弱行にして堅志を把持するものなく、世の風潮にあはられて飄々、遑々、五里霧中に彷徨ひて其行く處を知らず、其日を出來る丈け巧みに繰り行く裏棚生活の今日主義を、道義心に應用して主義なく定見なく覺悟なく、機に臨み變に應じて自ら之を處理せんとし、遂に矛盾を生じ、誤措を生じ、果ては罪惡の淵に陥るあるも亦宜ならずや。倫理學を以て單に理窟に過ぎずとして、之を蔑視せ少くとも敬みて遠けむとするは、倫理

學が余り理を論ずるに重きを置き過ぎて、之が實踐躬行の方法を示す事極めて少きに由らずむばわらず。此實踐躬行の點に於ては吾人は中學、高等學校の倫理よりも小學に於ける倫理否修身科を重んずるもの也、小學に於ては倫理の理を講ずるに非ずまて（倫理の理は幾何に於ける如くセルフエビデンスなる公理として之を解する要せずとして）修身の方法を説けるを以て最も修身の道に適え、倫理の眞目的に合えたりき、而れども既に中學となりては修身の方法即ち倫理學の實踐躬行を説かずまて、論語中庸等によりて倫理の理即ち殆ど哲學の範圍に踏み込み入り。之れ亦素より必要なれども單に之によりて倫理の目的を達せんとす。據木求魚の評あながちに無理なりとすべからざるを見る也。倫理既に然り他専門の學科は云ふに及ばず。要するに、今日教場内に於て、學科以外品性の修養を望むは殆ど不可能の事たり。然らば此缺點を補ふの法如何、吾人は師弟の交情を眞密にし師弟相接するの度を屢々にえ、講義によらんよりも座談に、耳によらんよりも目によりて感化といふ媒介物によりて學生の道義心を確實ならしめむ事を希望す。而して之を遂ぐる方法として、先づ諸先生に向つて、訪問時間を設けて、自宅の門戸を開放し、普く訪問の生徒を引きて、薰陶教導の勞を執らるゝに客ならざらん事を望まずんばあらず。今日に於て、訪問時間の公示なきも、生徒は常に師を訪問して、其教示訓導を受けるを得る筈なれども、時間設定のなきは、相方共に不利益にして、先生の方に在ては時間を徒費え、生徒に於ては機會を失え、折角訪問するも不在の厄を免れざる等、萬事咄咄不都合のもとなれば、速に此訪問時間を設定せられて、吾人の此望みを空うせざらん事を希ふ。

粗野か、不遜か、將た自重す、

禮義辭讓は人間の美德也、と云ふ迄もなく、吾々同窓攻學の徒が、途に相逢ふ、互に脱帽一揖、而て禮を失はざらむ事は、外見以外、當に守るべく力ひ可き美德なる事は、今更喋々するを要せざるべし。而て此風は、確に吾校の美風として天下に誇るに足る所なりと云なり。由來、朴直にして誠實なるは、吾龍南の校風を組成せる最重要素にまて、交友の間、一點の虚偽を容れず、赤心を攄極ま、肝膽相照して、意氣軒昂、慷慨以て志を談じ、禮の如きも、輕浮に流れず、器械的に陥らず、所謂和を以て尊しとなして、和氣洋々の裡に此美風を醸成せり、然るに、本學年に至りて、此風頓に潰亂せんとする兆あるは何ぞや。之を舊古參の士に聞く、曰く、此度の新入生は横着にまて先づ帽を脱するを知らず、吾何ぞ先づ腰を彼輩に屈せんやと。又去つて、新入生を叩き、問ふに卿等何故に禮を爲さるかを以てす、彼答て曰く、吾等豈に禮を爲すを欲せざらんや唯性粗野にまて禮に嫻はず、かの昂々焉たる先進諸兄に對するや、畏懼の余り機を失し、過つて之を飲ぐ事あるのみと、あゝ吾人其何れか眞なるを知らざれども、或は恐る各々半面の眞理を其中に含めるに非ざるかを。新入の諸子が、自重心の發する處、禮を以て卑屈人に諷るの所業と誤想し自ら進みて之を爲すを屑とせず、往々不遜、無禮に陷るは、鼓をならして責むべき處なれども、古參の舊入生が、已の威嚴(?)を保たんが爲め、我何ぞ先づ腰を彼輩に屈せんや、と意氣込むに至りては、禮義辭讓の何物たるを解せざるの甚まきに驚かずんばあらず。昔は敬の爲めに禮ま、今は禮の爲めに禮す、而て此禮の爲めの禮も廢れんとせり。豈に浩歎に堪ふ可けんや、或人曰ふ、これ七年の修學年限が三年に縮められたる結果なりと。それも有るべし。然れども此理由を以て當然の結果として顧みざるは吾人の取らざる處なり。其故如何となれば、禮義辭讓は交友時日の長短に關らず、其人間の美德とまて品格の一要素たるに於て毫も異なる處なければ、七年の



交友に於て存せし禮義が、三年なればとて存する能はざるの理なく、却て平等にして和氣藹然たる眞の禮義は、上級下級の差異甚きからざる今日に於て、發生するの望あれば也。上級生が己の威嚴を墮さいらんが爲めに、虚傲を衒ひ、下級生が卑屈を恐れて、不遜を事とする如きは、會々以て其偏狹にまて、雅量なきを示すに足るのみ。あはれ、朝に龍山の松籟を聞きて學窓の塵を拂ひ、夕に白水の瀨聲に吟じて交道の日に衰ふるを嘆するの徒よ、區々たる感情を棄て、此校の爲め、此美風を潰す勿れ。

### 敢て一部以外の諸子に告ぐ

本誌は委員の雜誌にもあらねば、法文二科生の雜誌にもあらず、即ち第五高等學校を包含せる龍南會員の雜誌也。されば其載せんと欲する處、豈に法科的文科的文字にのみ限らんや、數學可也、理化學可也、はた動植物可也、何にても、諸君が研究の結果にして、之を七百の會員に頒ち、其意見を問はんと欲せば、乞ふ遠慮なく之を本誌に投せよ、本誌は喜びて此種の投書を掲載せん。況んや二部的、三部的、乃至工學部的の眼識を以て、一部の範圍内に侵入し、奇警卓抜の論議を逞うするも亦快事ならんぞせんや。近着の一高校友誌を見るに、論說雜錄殆ど皆二部生の手に成り、文科生の如きは、僅に文苑の一隅に塾居するを見るのみ。かく極端に走るも亦望まきからざれども、本誌の如く、論說雜錄文苑皆殆ど一部生の占領に任せあるは、本誌の甚だ喜はざるの處也。凡そ專問以外の智識より來る議論、作物には、專問家の企及す可からざる、斬新奇抜の愛すべく、興味ある趣きあるを常とす。活氣なく、精彩なく、半死半生の老翁の如きは、本誌近來の面影也。是れ吾等委員の努力足らざるに坐すと雖も、また諸君の幫助を得るに非ずんば、吾等微力の能くする處に非ず。あはれ一部以外の諸君よ、諸君が鉛票

を削り、コンバスを執るの傍ら、其明察なる胸裏に映し來る思想を、一技の管城子には托して、詞上に揮灑するに吝なる勿れ。希くは、以て本誌をして一段の活氣を増し、異彩を放たしむるを得むか。これ獨り吾輩委員の面目のみならず。吾校全体の光華を増すものならずや。

### 果して元氣の恢復か

人若く未だ一度も學寮に入りし事なきものに向ひて、寮には一種の狂嵐あり、其起るや、轟然鬨然、或は金盃を叩き、或は机を撃ち、或は戸を蹴り、床板を踏み鳴らし、忽にして鯨波をあげ、忽にまて詩を吟し、忽にして軍歌を齊唱し、其まきに至りては俗謡を高唱して痴人の狂態を演出せ、踊躍奔騰、怒れるか如く、狂せるか如く、全寮を轟動えて、規律を破り、他人の安眠勉強を妨害せ、傍若無人の行を爲すものあり、と告ぐるも、誰か能く之を信せん、誰か能く之を信せん。苟くも習學寮を以て、學校の中堅となせ、精髓となし、校風の醸成所を以て目するもの、豈に能く之を信せんや。然り殆ど信す可からざるの事なり。而して此信す可からざる奇現象が、甚だ屢々寮内に起るありて、お互と云ふ口實の下に、今は殆ど默許の姿となり居ることを訝えけれ。或は曰ふ、彼等勃々たる元氣を平素深く腹底に包藏して、鬱然蟠屈せるものが、一度親睦會席上、狂水の歟はる所となり、勃然として抑ふ可からず遂に平素の謹慎をも忘れて此舉に及ぶのみ、何ぞ深く咎めんやと。有り難い哉、此元氣。吾曾て、普通元氣を包藏せりと傳へらる、人が、腕を扼し机卓を叩きて悲歌慷慨するを聞きまが、未だ金盃を叩き破り、竹刀を揮うて机を撃ち叩き、椅子を蹴飛ばし、次圍太ふみて悲歌慷慨せま程の、大々的元氣あるものを見ず。今や吾寮生諸君の中には、此大々的元氣を包藏せらるゝ者多きと聞く、有り難

い哉。近頃、元氣の衰頹を嘆ぜらるゝ志士よ、吾寮に此大々的元氣あり、口を啣み、心を安じて可なり矣、噫、

正

誤

運動會前後多忙の爲め校正を怠り多くの誤植を生ぜり甚しきもの二三を左に

頁數

行數

誤

正

二九

二

すみはび

すみわび

三八

六

まづめよと

まづめとや

三九上

六

浴衣

浴衣

全

一七

颯々の勢

颯々の聲

全

二一

其勢切々

其聲切々

全下

三

歡樂極今

歡樂極今

五八

上段一行より七行迄衍